

# 周南市とふぐ

周南市沖から大分県の姫島沖にかけての瀬戸内海の海底には岩が多く、さらに潮の交流が激しいために、海草や稚魚などが豊富で、それをえさにするふぐの生息に適した海域です。そのため古くからふぐ漁が行われ、その多くは関西方面に輸送されていました。

ふぐは鋭い歯を持っており、縄を噛み切ってしまうため、ふぐを捕獲する漁法の歴史は試行錯誤の歴史でもありました。ふぐを捕獲する方法にはいろいろありますが、一般的なのが「はえ縄漁法」です。この方法が最もふぐを傷めることなく、新鮮なまま市場に提供できるのです。

現在のはえ縄漁法では鋼線が使われていますが、これは周南市の給島で作りに上げられたものです。漁法確立に大きく貢献したのは、漁師である高松伊予作さん。明治30年代に考案し、その功績により大正11年の平和記念東京博覧会で、褒賞を授かりました。



高級魚の代表格「とらふぐ」

# ふぐはえ縄漁発祥の地 すくもじま 給島

給島は徳山駅より海上約8km、陸路では約16kmの大島半島の突端に接する所にある、周囲およそ2kmの小さな島です。現在は、大島半島上地区と小瀬戸橋で結ばれています。

もともと魚浦として発展してきた島で、島の北側に漁家が道なりに並んでいます。ふぐ、さわら、ちぬなどを始めとする高級魚の一本釣りや、はえ縄漁を中心に推移してきました。

また、島全体が絶好の釣り場となっており、四季を通じて多くの釣り客が訪れています。

給島は元来「椽島」と表記していました。その字が示すように米の家、すなわちスクモ（もみがら）が海上に伏せて浮かんでいるような、形の整ったかわいい島です。

瀬戸内海国立公園「太華山」に相對し、「ふぐ」と「海を渡るみこし」で有名な、貴船神社の夏祭りが行われる島です。



# ふぐはえ縄漁

ふぐはえ縄漁法には、からすふぐを対象とする「浮はえ縄漁」、とらふぐ、まふぐを対象にする「底はえ縄漁」がありますが、基本的に大きな違いはありません。

これらの漁法では、ふぐの歯による噛み切り防止として、長さ40cmほどのカタガネ（ジャンガネ）と呼ばれる17～18番の鋼線を使います。仕掛けは下図の通りで、中央でリンクをつないでそこから枝縄を出し、釣り針をつけます。そして幹縄を8mごとにくくり、円形の用具（こしき）に収めます。

えさは、3～4個に切ったイワシに塩を加え、かき混ぜて保存したものを翌日使用します。



ふぐの漁場となっている周防灘



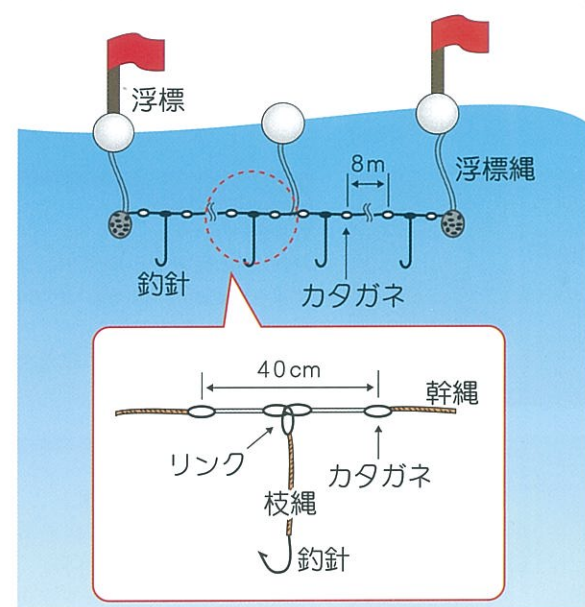
## ふぐのモニュメント

山口県では、平成元年にふぐを県魚に指定しました。先賢の徳を尊び後継の志を称えるため、ふぐ漁の発祥地である給島に、このモニュメントが建立されました。大島半島から小瀬戸橋を渡ると、石柱の台座の上に乗ったユニークなふぐが、来島される皆さんをお出迎えます。



## 貴船神社の夏祭り

「海を渡るみこし」として全国的に有名なこの祭りは、およそ300年前に安全と大漁を祈願して始まりました。みこしは、白装束に身を包んだ30人程度の若者に担がれ、貴船神社と荒神森までの約500mを往復します。フォトコンテストも開催され、多くの写真家も訪れます。



ふぐはえ縄漁（浮はえ縄）の仕掛け